

ケアする人、
ケアされる人のために

ノンフィクション作家
柳田邦男

あなたは、何を どのように見えていますか？

昨年の初冬のころ、ドキュメンタリー映画と絵本という、相互には直接関係のない作品が、偶然同時に私の目の前に現れて、私はそれぞれに深く感銘を受けるという経験をした。しかも、2つの作品は、哲学的にも人間論的にも、ほとんど同じと言ってもよい意味が根底にあり、そのあまりの共通性に、私はただただ不思議な思いにふけるばかりだった。

ドキュメンタリー映画は、絵画や彫刻に造詣の深い岡野晃子監督による『手でふれてみる世界』だ。イタリアに30年前に創設された、目が見えない視覚障害者のための「オメロ触覚美術館」の誕生秘話やその美術館が障害者や芸術の世界にもたらした意味を、現地ルポによって構成した作品だ。岡野さんは、静岡県三島市から富士山寄りに入った長泉町の丘陵地にあるヴァンジ彫刻庭園美術館の副館長を昨年まで務めていた人で、イタリアの現代彫刻家ジュリアーノ・ヴァンジ氏と親交がある。ヴァンジ氏は、「オメロ触覚美術館」の建設に深くかかわるとともに、多くの作品をその美術館に提供していることから、岡野監督が「オメロ触覚美術館」に強く関心を寄せることになったのだ。

一方、絵本『みえなくなったちょうこくか』は、長年にわたり木製の彫刻作品を創作してきた彫刻家・三輪途道さんが人生の半ばに難病で失明し、絶望の淵に立たされながらも、失明後は、粘土と漆を使って造形する脱乾漆という方法で作品を製作する表現方法に挑戦し、創作活動を断絶することなく続けている生き方を描いたものだ。

三輪さんのその生き方を、失明する前から交流のあった元新聞記者で、医療問題などの本を書いてきた立木寛子さんが、三輪さんの

生き方と創作への姿勢を、詩の形でまとめ、6人の写真家による多彩な三輪作品の映像を詩の言葉に合わせて配置することによって、絵本に構成したのだ。

まず映画『手でふれてみる世界』について、もう少し詳しく紹介しよう。

「オメロ触覚美術館」が生まれた経緯はこうだ。フランス・パリのルーブル美術館をはじめ世界には著名な美術館が多々あるが、どの美術館も目に見える人しか鑑賞することができない。視覚障害者は排除されているのだ。なぜ視覚障害者は絵画や彫刻などの芸術作品を鑑賞させてもらえないのか。

そのことに強く疑問を抱いたのは、イタリアの点字学者で視覚障害者への芸術教育を専門とする研究者アルド・グラッシーニ氏と妻のダニエラ・ポッテゴニさんだ。夫妻とも全盲だが、旅が好きで世界80カ国以上を旅して、民族によって違う調度品や楽器などを手で触れて楽しんできたが、どこの国に行っても、美術館に入って芸術作品を楽しむことができないのが残念でならなかった。絵画作品は触れられないのは止むを得ないにしても、せめて彫刻くらいは手で触れてその造形の美しさを感じ取りたいと思っても許されないのだ。

そこで夫妻はイタリアの地元で、手で触れて楽しむことのできる美術館を作ろうという運動に取り組んだ。

現代イタリアの代表的な彫刻家ヴァンジ氏が、その活動を強く支援した。アルドとダニエラ夫妻が暮らしているのは、長靴の形をしたイタリアのアドリア海に面した東海岸の中部にあるマルケ州アンコーナという港町だ。夫妻はヴァンジ氏ら多くの人たちの支援を受けて、州政府や市に働きかけた結果、ついに1993年にマルケ州の公的支援を受けて「オメロ触覚美術館」を創設することが

できたのだ。しかも、1999年には、イタリア議会の議決を経て、国立美術館となり、国の文化政策の中にしっかりと位置づけられたのだ。

「オメロ」とは、ギリシャ古代の盲目の吟遊詩人ホメロスのイタリア名だ。その名を冠したのは、たとえ視力がなくても、『イリアス』や『オデュッセイ』のような世界ではじめての長編叙事詩を創作できたということに示されるように、盲目であっても芸術分野の世界における表現活動ができるし、鑑賞することもできるのだというメッセージを表明するためだ。

「オメロ触覚美術館」には、広い会場のあちこちに、ヴァンジ氏の彫刻作品はもとより、ギリシャ・ローマ時代やルネッサンス期の著名な彫刻作品の実物大のレプリカなどが飾られていて、訪れる視覚障害者がそれらを手で触って鑑賞することができる。学芸員が障害者の手を支えて作品の全体像から特色ある部分までを丁寧に説明する役目を担っている。

岡野監督の映画は、そうした「オメロ触覚美術館」の状況を丁寧に捉えるとともに、アルド氏やヴァンジ氏の語りや、見学した障害者へのインタビューを挿入することによって、「触覚」つまり「手でふれてみえる世界」がどんなものであるかを、感銘深く伝えてくれるのだ。そうした言葉の中から、特に私の脳裏に強烈に刻まれたものを記しておこう。

「私が彫刻を創る時、手が大事だ。目で見てしまうと、手が感じなくなる」

「触覚は相手を知り友情で結ばれるのを可能にするものだ」

「子どもは美しいものを手で触れて感じて育つべきであり、触覚と視覚が重なることで豊かな感性が育つのだ」

これらの言葉からは、触覚による芸術作品の鑑賞は、晴眼児・晴眼者にとっても重要であることを示している。人間はもともと五感を持って生まれてくるのに、いつの間にか視覚依存に偏っていることを気づかされる。赤ちゃんや幼い子の“心育て”において、顔や目を見つめ、声をかけ、頬

ずりし、抱きしめるという全感覚動員での接触がいかに重要であるかを改めて気づかされるではないか。

触覚のそうした重要性は、私たちが「見る」とはどういうことなのか、目で見ただけで本当に相手や対象の奥深くまで捉えているのかというとても深い問題を投げかけているのだ。

絵本『みえなくなったちょうこくか』も、全く同じことを提起していることが、絵本の文である立木さんの詩からストレートに伝わってくる。

〈だんだん／だんだん／せかいが くらくなってきた〉
〈あるあさ／めのまへは／ひかりだけになった〉

次の頁は、見開きいっぱい黒だけが広がる中に、三輪さん製作の彫刻キリンの長い首から上だけが突き出て照明が当てられている。キリンの目は、真っ直ぐ前方を見て、何かを深く考えているようだ。

〈さあて どうしよう〉
の1行だけが添えられている。

その頁をめくると、三輪さんの作品の代表作とも言える、表紙にも使っている、かがんで前をしっかりと見つめる少女の像が挿入され、詩はこう続く。

〈みえなくなった／けれど／あたしはあたし／あたしは ちょうこくか

せかいにあふれる たましいを／あたしの手でかたちにしたい〉

最後近くには、こう語られる。

〈みえなくても みえるんだよ／ここで みているよ〉

三輪さんは、詩をつくった立木さんに、「自分の思いを、そのままに表してくれてありがとう」と言ったという。

立木さんは、詩の最後とあとがきで、問いかけている。

〈ねえ／みる、ってなんだらう／みえる、ってどんなこと？〉

映画『手でふれてみる世界』が問いかける問題と全く同じではないか。偶然にこれら2つの作品に触れた私は、2乗倍に深い学びを得たのだった。

みえなくなった
ちょうこくか

みえなくなった
ちょうこくか



みえなくなった
ちょうこくか

みえなくなった
ちょうこくか
たちきひろこ(文)
みわみちよ(彫刻)
定価 1980円(本体 1800円+税
10%)
メノキ書房